

『源氏物語』すれ違ふ姉妹の行方

— 椎本巻・八の宮哀傷歌をめぐって —

磯部一美

一 はじめに

宇治の大君と中の君の姉妹はそれぞれに違う属性を持つ、ゆえに違う人生を歩んだのだ——ということは、今更確認するまでもないことのようにもある¹。しかしながら近年の研究においては、構造論的な立場から二人の同一性を重視した立論が少なからず見受けられる²。たしかに、橋姫巻冒頭では二人は、出生のあり方、八の宮の養育態度（「いづれをも、さまざまに思ひかしづききこえたまへど……」〔橋姫二二〇頁³〕、成長の過程（「……さまざまにおはす」〔橋姫二二二頁〕）等に見られるように、それぞれ明確に描き分けられるが、成人後その差異はほとんど問題視されず、むしろ「二ところ」〔椎本一八七頁〕、「同じ心」〔同頁〕などと常に相似形の一对の姉妹であることが強調される。姉妹はその特殊な生育環境から互いに深く結びつかざるを得なかったのであり、成人後についての〈語り〉が、

差異よりも同一性により比重が置かれてしまうことも故なしとしな
い。

しかし本稿ではあえて、同一性ということばの中に埋没してしまっている、互いに主張しあう〈個〉としての大君、中の君の姿に今一度注目してみたい。「宇治十帖」の人物たち（ここでは姉妹）が、他者との関係性の中でしか存在できないとするならば、その関係を形成する基盤となる〈個〉と〈個〉の単体としてのありようこそが重要であると考ええるからである。

さて、椎本巻において八の宮の薨去が語られる。父宮の死は、姉妹がいよいよ互いだけを頼りにして生きてゆかざるを得ない自覚を促すことになる。二人はその絆を確かめるように、同年の暮れと翌年の春と二度にわたってそれぞれ哀傷歌を詠出するのだが、物語の中で二人の贈答歌が具体的に記されるのは、実はこの二箇所しかないのである⁴。無論二人がこの他にまったく歌を交わさなかったとい

うことはなく、後に中の君は「行きかふ時々に従ひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、心細き世のうさもつらさもうち語らひあはせきこえしにこそ、慰む方もありしか…」〔早蕨三四五頁〕と回想している。なぜ物語中に姉妹の贈答歌が二度しかあらわれないのか。換言するならば、なぜこの二組の贈答歌に限って語られねばならなかつたのか。

本稿ではこの点に注目し、二組の贈答歌について詳細な検討をえてみたい。手順としては、まず二つの歌の場面を比較すること、姉妹の〈生〉のあり方の違いを見出し、続いてこれらの贈答歌が物語に記された意味を考えていくこととする。

二 両場面の同一性と差異

まず、対象とする二つの場面を掲げる。

本文A 〈年の瀬の贈答歌〉

雪、霰降りしくころは、いづくもかくこそはある風の音なれど、今はじめて思ひ入りたらむ山住みの心地したまふ。女ばらなど、「あはれ、年はかはりなんとす。心細く悲しきことを。あらたまるべき春待ち出でてしがな」と、心を消たず言ふもあり。難きことかなと聞きたまふ。……このごろのこととて、薪、木の实拾ひて参る山人どもあり。阿闍梨の室より、炭などやうの物奉るとて、「年ごろにならひはべりにける宮仕の、今とて絶え

はべらんが、心細さになむ」と聞こえたり。かならず冬籠る山風防ぎつべき綿衣など遣はししを思し出でてやりたまふ。法師ばら、童べなどの登り行くも、見えみ見えすみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でて見送りましたまふ。「御髪などおろいたまうてける、さる方にておはしまさしかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」など語らひたまふ。

君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る中の宮、

奥山の松葉にも雪とだに消えにし人を思はましかば
うらやましくぞまたも降りそふや。〔権本二〇三〜二〇五頁〕

本文B 〈新春の贈答歌〉

年かはりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の水とけたるを、ありがたくもとながめたまふ。聖の坊より「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨など奉りたり。齋の御台にまゐれる、「所につけては、かかる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人々の言ふを、何のをかしきならむと聞きたまふ。

君がをる峰の蕨と見ましかば知られやせまし春のしるしも雪ふかき汀の小芹誰がために摘みかはやさん親なしにしてなど、はかなきことどもをうち語らひつつ、明け暮らしたまふ。

八の宮の死は「八月二十日のほど」〔稚本一八八頁〕のことであった。本文Aはそれから四ヵ月程が経った十二月末のことであるが、姉妹の悲しみは癒えることがない。女房たちは沈み込んだ邸内の雰囲気であらためるためにも早く春が来てほしいと願うが、姫君たちは「難きこと」と思う。そんな折り、阿闍梨の元から「炭などやうの物」が法師や供の童らによって届けられる。姉妹は、深い雪の中を帰山する使いの者たちの後ろ姿に、山寺で亡くなった父宮を偲び、歌を交わす。

一方本文Bは、それから程ない翌春の場面である。阿闍梨の元から今度は芹や蕨などの山野草が届けられる。いち早く訪れた「春のしるし」に女房たちは喜びを交わすが、姫君たちは悲しみを分かち合うばかりである。

本文AとBの場面は、春の到来を切望し、またはそれを喜ぶ女房たちの会話（——線部）から、それに共感し得ない姫君たちの心情が語られる（~~~~線部）、という展開の様相が共通する。またその位置は前後するにしても、阿闍梨からの季節の贈り物が語られる（——線部）という点も重要な共通点としてあげられよう。しかしその類似性は、同時にその差異をも明らかにしてしまいうに違いない。両場面の違いとは何か。

本文Aの和歌において、姫君たちは父宮の亡くなった阿闍梨の山寺に関わる言葉、すなわち「岩のかけ道」「奥山（の松葉）」を詠み

込んでいる。姉妹はひたすら亡き父宮を慕っており、父宮の眠る山寺と生前暮らしていた自邸とをつなぐ訪問者の帰山が、二人に歌を詠出させる端緒となったのであった。この時の二人は、春の到来を待ち望む女房たちの言にはほとんど同調できないでいる（~~~~線部）。一方本文Bの和歌は、阿闍梨からの贈り物ではあるが、父宮の記憶には直接かわからない「峰の蕨」「汀の小芹」を、そのまま歌に詠み込んでいる。ここでは詠歌のきっかけが、芹、蕨などの野草に春の到来を感じ喜ぶ女房たちへの反撥であることを見逃してはなるまい。本文Aでは「難きことかな」という心中思惟に終わって来た女房たちへの違和の思いが、本文Bにおいては「何のをかしきならむ」と心中に呻吟するにとどまらず、〈声〉を伴う表現行為へとそのまま展開するのである。

姫君たちは本文Aではひたすら亡き父への哀傷の思いに沈んでいるのに対し、本文Bでは春の到来を喜ぶ女房たちや、否応無しにやってくる春という季節に抵抗する形で歌を詠んでいる。反撥とは跳ね返すことであり、そのためには相応のエネルギが必要であろう。本文Bにおける姉妹は、もはや悲しみに打ちひしがれているだけの存在ではない。むしろ積極的に周囲と対峙していこうとする〈生〉の姿勢がここにはある。

従来、本文Bの贈答歌は、二人が周囲に反撥し、ますます二人だけの世界に入り込んでゆくものとして解釈されてきた。しかし本文Aと比較することによって、本文Bの場面が、むしろ二人が父の思

い出だけに縋つて生きることをやめて、それぞれの〈生〉を歩みだそうとしている姿ととらえることができまいだろうか。本文Bの場面は、八の宮哀傷という物語の流れに取りあえずの区切りをつけるとともに、一方で新たな物語の展開を呼び込むものとなっていると読み得るのである。⁶⁾

三年の瀬の贈答歌に見る差異

(1) 寄り添う二人

八の宮の死後、忌みに籠もる者や弔問者などで賑わった宇治の邸だが、今となって訪れる者は誰もいない。訪問者が多ければ多いで恐ろしく、しかしいなければいけないでそれもまた寂しい——年の瀬を迎え、姉妹には父宮の不在が身に染みて辛く感じられている。そんな折り、阿闍梨の元から使者がやってくる。二人は返礼の品を持って帰山する法師、童を見送り会話を交わすのだが、それは「さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましや」〔本文A参照。以下同〕と、反実仮想表現によって覆いつくされたものであった。この本文Aの会話部分(……線部)は、本文Bには見られない独自の要素である。二人の会話は融和し、どちらがどのように発したもののかの区別がつかない。あたかもそれは、姉妹が互いのことを共有することで、その悲しみを融合させようとしているかのようである。しかしいくら語り合っ

たところで二人の心が一つになることはない。続く贈答歌は、まさにそうした会話からこぼれ出た、それぞれの悲嘆の〈声〉なのであった。

(2) 背反する心

大君は、「君なくて」「岩のかけ道絶えしより……」と、不在、断絶を意味する語を重ねることによって、父宮が亡くなった現実を直視した歌を詠む。「生きていると仮想したい」と語り合いながらも、しかし八の宮の死は厳然としてそこにあることを、大君は認めざるを得ないのである。どんなに待ちたくとも待つことはできぬ——そうした絶望感⁷⁾は、引歌として指摘されている次の歌からも読み取ることができるであろう⁷⁾。

世にふれば憂さこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

〔古今集 雑歌下 題不知・読人不知⁸⁾〕

この歌の上句からは、さらに大君が自らの〈生〉を憂えて、いつそ父宮の後を追って山へ籠もってしまったいと⁹⁾の気持ちまでもが読み取れる。また下句の「松の雪をもなにかは見る」には「待つ」の意が掛けられている。歌語「松の雪」は、はかないことの喩であるから、¹⁰⁾ここには待つ甲斐もなく過ごすはかない日々が投影されていると考えられる。さらに、「なにとかは見る」の「かは」も——諸注疑問と解していて特に問題はないようだが——反語の意ともとれる余地を残しており、¹¹⁾そうなると返答を期待しない自らへの問い

かけの形ともなる。父宮の亡くなった今、宮家の家長として生きていかねばならない己れの姿を顧みるとき、その未来は憂愁に覆われたものとし映らない——大君の歌は、父宮の死と、自らが置かれた「帰らぬ人を待つ」境遇と、自らの未来（将来）とを悲観的な思いで眺めたものであった。

一方の中の君は、大君の（山（里）の松）を受けて、（奥山の松）へと展開させている。「奥山」は、父宮の薨去した山寺を指しており、その背景には先程見送ったばかりの「法師ばら、童べなどの登り行くも、見えみ見えずみ、いと雪深きを……」の情景が想起されている。また、下句「消えにし人を思はましかば」には、歌の直前の語らい「……さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」が踏まえられていると考えられ、その会話（心情）がそのまま歌に流れ込んだものと見ることができよう。つまり中の君は、大君と二人で見た情景を、また共に慰め語り合つたことばを踏まえて歌を詠んでいるのである。それは中の君が大君に心を合わせよう、寄り添おうとしている姿に他ならない。中の君は、大君に心開いているのである。さらに、中の君の歌には次の歌が引歌として指摘されてもいる。⁽¹²⁾

深山には松の雪だに消えなくに宮こは野辺のわかなくつみけり

〔古今集 春上 題不知・読人不知〕

——線部に見るように、この古今集歌上句には「山」「松」「雪」

『源氏物語』すれ違ふ姉妹の行方（磯部 一美）

「消え」と、中の君の詠歌と同じ語が使用されている。また、深山では（はかないはずの）松の雪でさえも消えていない（消えにくい）のに——という歌意も、松の雪をはかなくはないととらえている点で、中の君の詠歌との共通性が認められる。しかしそれよりも重要なのは、この古今集歌には大君の問いかけ「松の雪をもなにかは見る」の「松の雪」がそのまま見えるという点であろう。おそらく中の君は、大君の問いかけに対してこの古今集歌を想起し、それを展開させて「せめて待つことを仮想できたら」と自らを慰める歌を詠出したのであろう。八の宮邸の庭の松から、宇治山の松へと、その空間を転移させながらも、中の君の歌は、大君と共通のことばや背景を詠み込むことで、共に寄り添って生きていこうとする、否、生きていかねばならない（生）のあり方を自覚的に詠んでいるのである。ふり返って、大君の歌は中の君の歌のような背景を持たない。深く自らの世界に入り込んで、他者を受け付けようとはしないのである。大君の歌は、語りかけながら自閉する。このように、両者の詠歌からは、まったく対照的な二人の心のありようが鮮明に浮かび上がってくるのである。

四 新春の贈答歌に見る差異

(1) 結束する二人

春の気配が漂い始めた宇治の山里に、阿闍梨の元から芹や蕨などの若菜が届けられた。阿闍梨から若菜が贈られるという場面は、本

文Bの翌春を描いた早蕨巻頭にも見ることができ、阿闍梨はそこで次の歌を詠んでいる。

君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり

〔早蕨三四六頁〕

「君」は八の宮を指す。また「つみ」には、蕨を「摘み」と年月を「積み」の意がかけられている。故宮にと毎年摘んできた蕨を、今年もまた忘れずにお届けします、との歌意であるが、春、八の宮家に若菜が贈られることは恒例になっていたのである。しかし、今までそれはいち早く春を告げるめでたい（若菜）として宮家の人々には受け取られてきたのであった。それが今年、服喪中の精進料理として食膳に供されている。今年この初蕨、初芹は（若菜）ではないのである。姫君たちはこの春が、昨年の春とはまったく違うものになってしまったことを、他ならぬ若菜を通して実感する。

そのような姉妹を尻目に、女房たちは待ちかねた春の到来に喜びの声をあげるのであるが、姉妹は論外のこととしてこれに大きく反撥する。大君は、女房たちの言葉「行きかふ月日のしるし」〔本文B参照。以下同〕をそのまま歌の中に「知られやせまし春のしるしも」と詠み込み、この蕨は春のしるしではない、春を受け入れることはできないと否定し去る。不快感をあらわにしていると見てよいであろうか。また中の君も、「所につけては…をかしけれ」と若菜をもてはやす女房たちに応じて「誰がために摘みかはやさん」と、埋めることのできないその心理的距離を慨嘆するばかりである。こ

れも女房たちの態度に対するあからさまな非難と見ることができよう。姉妹は、女房たちの会話をそれぞれ歌の中に否定的な形で詠み込むことによつて、周囲への對抗姿勢をはつきりと打ち出している。ここには本文A（……線部）に見えた、姉妹二人が互いに寄り添うようなしめやかな会話は一切ない。贈答歌の前に位置していた宮哀傷の会話——互いに慰め合う傷心の姫君たちの姿は、まったく消え失せているのである。姉妹はもはや悲しみに打ちひしがれているだけの存在ではないのだ。

と同時に、この贈答歌には姉妹が互いに深く結びつこうとする姿勢もまた描かれている。大君の歌は、昨年年の瀬の中の君の答歌を踏まえており、一方中の君は、その大君の贈歌を踏まえて返歌をしている。そうした姉妹のありようは、それぞれの歌の細部に焦点を絞り込むことによつてさらに明白となつてこよう。

次に掲げる表は、本文Aの年の瀬の贈答歌と、本文Bの新春の贈答歌を、同一または類似の語句などによつて便宜的に分類したものである。

（部は類似（同一）語句。……線部は関連語句。↑↓は大君B歌、中の君B歌で対比関係にあるもの。また、重複する語句は（ ）で括った）

大君 A	中の君 A	大君 B	中の君 B
君なくて		君がをる↑↓誰がために 摘み(かはやさん)	
岩のかけ道			
絶えしより	消えにし人を		親なしにして
松の雪をも	松葉につもる 雪とだに	春のしるしも↑↓雪深き	
何とかは見る		見(ましかば) (摘み)かは やさん	
	奥山の	峰の蕨と↑↓汀の小芹	
	思はましかば	(見)ましかば 知られやせま し	

【源氏物語】すれ違ふ姉妹の行方 (磯部 一美)

大君B歌は、まず「君がをる(折・居)」と詠出する。「峰(山)に父がいる」という発想は、中の君A歌「(父を)奥山の松葉につもる雪とだに(見たい)」をそのまま受けていると思しい。また中の君A歌の反実仮想「まし」は、大君B歌では「ましかまし」と、より強調されて用いられている。類似した発想といい、類似した形式といい、ここからは大君B歌が中の君A歌を強く意識して詠まれたであろうことが十分に察せられる。またこれに対する中の君B歌も↑↓で示したように、「君(父親)がを(折)る」に対して「(子である自分が)摘む」、「峰(山)」に対して「汀(里)」、「蕨」に対して「小芹」、「春」に対して「雪深き(冬)」と対比的な語を用いて、やはり大君の歌を意識し、絡み付くように返歌をしている。

二人はそれぞれのことばを意図的に重ねあうことで、その心理的結束をより強固なものにしようとしているのである。姉妹がこのように強く結びつこうとする理由には、例えば、本文AとBの間に挟まれた薫の宇治訪問がその背景として考えられようか。

中納言の君、新しき年はふとしもえとぶらひきこえざらんと思
しておはしたり。……(大君ハ)うちとくとはなけれど、さき
ざきよりはすこし言の葉つづけてものなどのたまへるさま、い
とめやすく、心恥づかしげなり。かやうにてのみは、え過ぐし
はつまじと思ひなりたまふも、いとうちつけなる心かな、なほ
移りぬべき世なりけりと思ひるたまへり。……「暮れはてなば、
雪いとど空も閉じぬべうはべり」と御供の人々声づくれれば、帰

りたまひなむとて、「心苦しう見めぐらさるる御住まひのさまなりや。ただ山里のやうにいと静なる所の、人も行きまじらぬはべるを、さも思しかけば、いかにうれしくはべらむ」などのたまふも、「いとめでたかるべきことかな」と片耳に聞きてうちゑむ女ばらのあるを、中の宮は、いと見苦しう、いかにさやうにはあるべきぞと見聞きあたまへり。

〔権本二〇五—二二頁〕

薫は、この年の瀬の宇治訪問で、大君への愛情をはつきりとその胸の内に意識する。そして匂宮の中の君への懸想（ただし匂宮自身は姉妹を区別して恋情を訴えているのではない。匂宮が中の君の方を慕っているとするのは、あくまで薫の都合よるもの）にこと寄せ、自らの気持ちを大君に大胆に訴えかける。八の宮亡き今、薫は姫君たちの後見として絶対的な位置にあり、大君への接近は、それを助ける者（女房たち）はいても、阻む者はない。薫はさらに大君に京に迎え入れたい旨を申し入れ、帰京する。

この場面で姉妹は、薫の懸想相手としての大君、匂宮の懸想相手としての中の君と、それぞれ薫によって明確に振り分けられる。また、いつ男たちを手引きしてもおかしくない女房たちの姿も同時に語られており、二人を取り巻く環境は確実に変化してきているのである。父宮の遺言を遵守し、世間に翻弄されることなく生きていくためには、もはや互いの結束は不可欠なのだと言えよう。

この訪問に続いて語られる新春の贈答歌は、姉妹が一体となっ

て生きていこうとする〈生〉の姿勢を強く打ち出すものなのであった。

(2) 背反する心

しかし、その内実もはたして一体だったといえるだろうか。例えば、大君の歌は「君なくて」「君がをる」と「君」という親愛の情を込めた二人称的表現を一貫して用いている。それに対し中の君の歌は「消えにし人」「親なしにして」と、やや距離を置いた三人称的な表現を用いている。二人の父を慕う心情は決して一体ではない。さらに詳しく見ていくことにしたい。

まず、(1)でも触れたが、大君B歌は中の君A歌の反実仮想「思はましかば」を受けて「見ましかば：知られやせまし」と詠んでいる。これを単なる呼応ととらえて済ませてしまつてはなるまい。大君は、中の君と同じ語をあえて用い、さらには二度重ねることによつて、春を拒否する心情をより強めているのである。父宮が折りよつて下さった蕨ではない。よつてそれは春のしるしではない。春の到来は認められない——大君は、父宮不在のこの春を受けとめかねている。

また、「君が・居る・峰」という意味の連鎖と同時に成立している「君が・折る、蕨」の方を重視するならば、自分のために蕨を折りよつてほしい」と解釈することが可能であり、その場合「誰かのために（自分が）折り取る」という状況ではなくなる。ここで次の

ような歌が想起されるのである。

(a) 霞立つ春日の野辺の若菜にもなり見てし哉人もつむやと

〔後撰集 春上 題不知・読人不知〕^③

子日に、男のもとより「今日は小松引きになんまかり出づる」と言へりければ

(b) 君のみや野辺に小松を引きに行く我もかたみにつまむ若菜を

〔後撰集 春上 読人不知〕

(a) 歌は、詠者である女自身を「野辺の若菜」に見立てる。歌意は、(自分が若菜となつて) 摘んでもらいたい。女から男への大胆な詠みかけであると理解されている。また、(b) 歌は、(小松引きに出かける男に対して) 女である自分も一緒に野辺に出て若菜を摘みたい、という意である。「摘んでほしい」ではなく「相手と一緒に摘みたい」という詠み方は、(a) 歌とは発想を異にしているが、女からの積極的働きかけという点では類似性が指摘できよう。

これらを大君 B 歌と照らし合わせてみるならば、大君 B 歌は、まるで父宮を恋人のように受けとめ、自分のために若菜を手折ってほしい、と詠みかけていると読み取ることができないのではないだろうか。大君の歌の主体は、あくまでも〈君〉(父宮) に対する〈我〉なのである。本文 A の場面では、大君の歌に自己に固執した自閉的な性質があることを指摘したが、この大君 B 歌からも同様に、自己本位な大君の性格の一面が読み取れよう。そしてそれは中の君の歌と対比することで、よりいっそう鮮明になってくるのである。

〔源氏物語〕すれ違ふ姉妹の行方 (磯部 一美)

中の君 B 歌は、若菜を摘むのはあくまでも自分であり、贈るべき相手は〈親〉(父宮) である。そもそも芹や蕨などの若菜を摘むことは、新しい生命を体内に取り込むことでその年の無病息災を祈るという呪的行為であった。民間の習俗としてあったものが、延喜、天曆の頃、宮廷行事として取り入れられ、以後盛んに歌のなかにも詠まれていったのだと言われている。^④『源氏物語』若菜上巻にも、玉蔓が養父・光源氏の四十賀に若菜を献上した際の歌の贈答の中に「若菜」という語が見える。

(玉蔓) 若菜さす野辺の小松をひきつれてもとの岩根をいのる
今日かな

(源氏) 小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむ
べき
〔若菜上五七頁〕

若菜を贈ることは、このように相手の長寿を寿ぐめでたいものなのだが、しかし中の君には、長寿を寿ぎたいはずの〈父〉は既がない。中の君の歌はさらに「だから私はわざわざ芹を摘んだりしない」と続く。ここで注目されるのは、中の君は大君と違って、春の到来を決して認めていないわけではないということである。本来ならば、早春の雪深い中をかき分けてでも父宮のために小芹を摘んであげたいのに——中の君の心は常に〈誰か〉(ここでは父宮) に向けて開かれている。

それは、同じように父を恋い慕いながらも、頑なに春の到来を拒否し、自らの悲しみの中に沈潜していこうとする大君とはあまりに

対照的な姿といえよう。

五 おわりに

ここまで八の宮の死の、その年の暮れと翌春の姉妹の贈答歌をそれぞれ対比的に見てきた。これらの場面は、阿闍梨からの贈り物、女房たちの会話、そして姉妹の贈答歌へと展開する状況が共通しており、このことは両場面が一つの流れの中で読まれるべきものであることを示している。

年の瀬の贈答歌は、姉妹がひたすら悲嘆に沈む中、阿闍梨からの贈り物を契機にして詠出されたものであった。二人は互いにことばを共有することで、その悲しみを融合させようとするが、しかしその心は決して一体となることはできない。大君の歌は「松の雪をも何とかは見る」と中の君に問いかけながら、その内実は、父宮の死によって自らに課せられた〈生〉のあり方を悲嘆するものであり、一方の中の君の歌は、大君と共に見た情景、会話をその歌の中に詠み込み、さらには歌語「松の雪」を用いた歌を引歌とすることで、悲嘆にくれる大君を慰めようとするものであった。ここには、自らの悲しみの中に埋没していく大君と、互いに寄り添って生きていかねばならない〈生〉のあり方を自覚する中の君の姿が描かれていた。

翌春の贈答歌は、同じく阿闍梨からの贈り物を契機として詠出されたものであったが、それは同時に春の到来に歓喜する女房たちへの反撥でもあった。二人はまるでその後の、周囲に翻弄される

〈生〉を予感するかのように、互いに結束しようことばを執拗に絡み合わせる。しかしその心はやはり一体とはなり得ない。大君は、年の瀬の中の君への贈歌同様「君」という語をその歌の中に詠み込み、父宮への変わらぬ親愛の情を示す。そして、その父宮が私のために若菜を折りとってくれたのだつたら…と慨嘆する。どんなに中の君と心あわせようとしても、また語り合っても、大君は父宮不在のこの春を受け入れることができないのである。大君の歌は、多分に自閉的で自己中心的なものであった。一方の中の君は、父宮のために早春の若菜を摘んであげたか…と、亡き父宮を念頭においた歌を詠む。中の君は決して春を拒否してはおらず、また「親なしにして」と、その死を受け入れてもいる。ここには、年の瀬同様に自らの悲しみの中に埋没していく大君と、それとは逆に自らの置かれた状況を甘受する中の君の、まったく対照的な姿が描かれているのである。

最初の問題に戻る。なぜ姉妹の贈答歌が、この八の宮哀傷の場面に限ってのみ語られねばならなかったのか。

姉妹は長い年月、父八の宮の庇護の下、長閑で穏やかな月日を過ごしてきたのであった。椎本巻における父宮の死は、そんな二人の精神を揺さぶり、その生活を根底から変えてしまう大きな事件だったのである。この場面に見える二人は、共に一体なろうとしながら、しかし一体化できないでいる。神田氏の言を借りるならば、それは「差異への欲望」ではなく「同化への欲望」と言えようか。しかし、

それらの欲望が満たされることは決してない。おそらく〈物語〉は、埋めることのできない二人の差異を明確にすることで、その後の二人のまったく違う〈生〉の起点を定めようとしている。つまり、この哀傷歌の場面において明らかにされた差異性こそが、その後の姉妹それぞれの物語を領導していくのである。

注

(1) 「三姉妹のうち大君と中君とは父母を同じくし、同じ父に育てられたが、二人の性質にはかなり大きな違いがあり、それが二人を異なる人生を歩ませる重要な原因ともなった」という重松信弘氏の論（『源氏物語研究叢書Ⅰ源氏物語の人間研究』第四章第五節「宇治の三姉妹」昭和55・3 風間書房）を待つまでもなく、姉妹が対照的な性格を付与されていることは、自明のこととして論じられてきた。一般に大君は「内向的。思考（理論）が先行する」などと言われ、また中の君は「受動的。体験によって成長する」などと言われている。

(2) アプローチの方法はさまざまであるが、姉妹という構図に着目したものには、例えば三田村雅子氏「第三部発端の構造」（〈初出：『日本文学』昭和50・11）『源氏物語 感覚の論理』平成7・3 有精堂）、茅場康雄氏「宇治十帖の造型―薫と中の君―」（『日本文学紀要』昭和63・1）、神田龍身氏「分身、差異への欲望―源氏物語―」（『宇治十帖―』）（〈初出：『物語文学と分身（ドッペルゲンガー）―源氏物語―』（『宇治十帖』）をめぐって―）『源氏物語と

『源氏物語』すれ違う姉妹の行方（磯部 一美）

平安文学』第1集、昭和63・12 早稲田大学出版部）『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降―』（平成4・9 有精堂）、河添房江氏「〈ゆかり〉の身体・異形の身体」（『源氏物語 試論集』論集平安文学第四号 平成9・9 勉誠社）、三田村雅子氏「大君物語―姉妹の物語として―」（『源氏物語研究集成』第二巻 平成11・9 風間書房）などがある。

(3) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集本（阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳 小学館）に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(4) 実は姉妹が歌を交わすのは、この場面だけではない。橋姫巻には、まだ幼少の二人が父宮と三人で唱和をする場面がある。拙稿『源氏物語』橋姫巻「水鳥の唱和」考―宇治の物語の〈始発〉として―（愛知淑徳大学国語国文第22号 平成11・3）参照。これは母親を哀傷する場面ともいえ、本稿との共通性が見い出せる。また「春」「哀傷」という点では、早蕨巻の中の君の歌も同時に想起されてこよう。これらの関連性についても注目されるところではあるが、今は別稿に譲りたい。

(5) 例えば『源氏物語の鑑賞と基礎知識No.16 権本巻』（監修・鈴木一雄 編集・雨海博洋 平成13・4 至文堂）の鑑賞欄には、「姫君たちは、ここでもまた、現実逃避・過去への陶醉を歌にしている。……せつかくの山の阿闍梨の志をも無にするような詠みぶりである。……いずれの場合も、受け取った姫君たちは、父宮を失った悲しみを新たにし、父宮が生きていてくれたらと姉妹で歌を交わしている」（二六九頁・岡山美樹）とある。

- (6) 原岡文子氏は「宇治の阿闍梨と八の宮—道心の糸—」(初出:「むらさき」昭和48・6)『源氏物語 両義の糸—人物・表現をめぐって—』平成2・1)の中で、本文Bの場面を取り上げ、「……逆に言えば、他ならぬ阿闍梨の贈った芹や蔦をめぐって、侍女達の反応を描き、それに対する姫君達の側のちぐはぐな思いを胸にした抵抗を浮き彫りにすることによって、はじめて匂・薫の新春の挨拶が抵抗なく物語に描かれ得たのだ」と阿闍梨論の立場から述べている。
- (7) 引歌の指摘については、笠間索引叢刊『源氏物語引歌索引』(伊井春樹編 昭和52・9 笠間書院)を参考にした。
- (8) 本稿における古今和歌集の引用本文はすべて、新日本古典文学大系『古今和歌集』(小島憲之・新井栄蔵校注 平成1・2 岩波書店)に拠る。なお引用和歌に付した傍線は、すべて引用者。
- (9) 大君の隠棲への指向については、すでに高田祐彦氏の論「山姫としての大君—宇治十帖の表現構造」(むらさき22 昭和60・7)に指摘がある。
- (10) 「松の雪」は、文字通り細い松葉に積もる雪のことで、積もりにくくまた消えやすいものであることから、非常にはかないものの喩として用いられた。諸注には伊勢大輔集収載の贈答歌、「紫式部」奥山の松葉に氷る雪よりも我が身世にふるほどぞ悲しき」「伊勢大輔」消えやすき露の命にくらぶればげにとどこほる松の雪かな(私家集注釈叢刊『伊勢大輔注釈』(久保木哲夫校注・訳 平成4・6 貴重本刊行会)が参考歌として掲げられている。同様の発想のものに、古今和歌集「深山には松の雪だに消えなく
- に宮こは野辺のわかなつみけり」「春上 題不知・読人不知」、公任集「松の雪消え帰りつつ君がため千年をへても我ぞつかへん」(新日本古典文学大系『平安私家集』(後藤祥子校注 平成5・12 岩波書店) などがある。
- (11) 大君の贈歌に反語(自問自答)の意を読み取るものには、例えば『源氏物語評釈 第十卷』(玉上琢弥著 昭和42・11 角川書店)の鑑賞欄「姉君は、『松の雪をもなにとかはみる』と妹に問う。妹は、せめて、この『雪とだに消えにし人をおもはましかば』と答えている。問うた姉も又、妹と同じ思いで問うたのであろうか。雪はつもれば、はかなく消える、まことにはかないものである。しかし、消えた上にまたつもるではないか。それに、松の雪は、誰かを待つ、というひびきもあるではないか。それなのに、『消えにし人』は、消えたまま帰って来ない。いくら待っても甲斐ないのである」や、新日本古典文学大系『源氏物語四』(柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎校注 平成8・3 岩波書店)の脚注「『松』に『待つ』をひびかせ、どんなに待とうとも父宮は帰らぬ、の思いをもこめる」などがあ
- (12) 岷江入楚に、「古今にみ山には松の雪たにきえなくといへるも消やすき物なればたにもといへり松葉このみよむへからす云々」(源氏物語古注集成第14卷『岷江入楚 第四卷』中田武司編 昭和58・2 桜楓社)とある。
- (13) 後撰和歌集の引用本文は、新日本古典文学大系『後撰和歌集』(片桐洋一校注 平成2・4 岩波書店)に拠る。掛詞などの指

摘についても同書に拠る。

(14) 『平安朝の年中行事』(山中裕 昭和47・6 塙書房) など。

(15) 注(2) 神田論文参照。

『源氏物語』すれ違ふ姉妹の行方 (磯部 一美)

一三